

語りの開始にともなう他者への指さし

——多人数会話における指さしのマルチモーダル分析——

安 井 永 子

1. はじめに

日常会話において、われわれは繰り返し自分や他人の経験についての「語り」を行う。語りは、見聞きしたことや体験したことへの主観を伝える語り手の自己開示の活動であるだけでなく、語り手と聞き手が語りに対する共通の評価を探り合ったり、共通経験を発見し合ったりする他者との協同の活動でもあり、人間関係の構築に大きく関わっている。会話分析の分野では、この、語りが会話参加者の協同作業の場であるという点に焦点を当ててきた。言語学では語りのみを会話から取り出し、語りを語り手が単独に生み出すものとして扱うことで、その全体構造を分析してきたのに対し (Labov, 1972; Labov & Waletzky, 1967)、会話分析的アプローチでは、日常会話に「埋め込まれた」語りを扱うことで、様々な日常の活動における語り手と聞き手のやり取りの中で語りが生み出され構築される過程を明らかにしてきた (Jefferson, 1978; Sacks, 1974, 1992)。

会話の中の語りの産出において、特に重要となるのがその開始である。語りは多くの場合、複数の文により成り立っているため、語りを行うためには通常の会話の順番取りシステムを一時停止させ、長い順番 (ターン) を確保する必要がある。そのため、語りが開始される前に、これから取得するターンが長いものになることや、そこで話される内容が、事前に聞き手に示される必要がある (Sacks, 1974, 1992)。Sacks (1974, 1992) は、語りを始める話し手が、その前置き (Story preface) を行うことを指摘している。例えば、「おもしろい話聞きたい？」という発話は、その話し手が語りを開始したい意志を持っていることだけでなく、その語りの「おもしろい」という特徴を予告することにもなっていると同時に、今から「おもしろい話」を開始する許可を聞き手に求めるものである。「許可」を示す返答が聞き手から得られれば、話し手はその次のターンから語りを開始することができる。

一方で、そのような「許可の依頼 - 許可 / 不許可」というやりとり以外で語りが開始されることも多い。Jefferson (1978) は、多くの語りのきっかけは会話の中で生じると指摘し、開始される語りが進行中の会話の中でどのような位置づけにあるのか、直前に起こったこととどのように関係し、それに対してどのような行為をしているのか、ということ語り手は明らかにし、会話におけるその特定の位置でその特定の語りを始める適切性を提示することで語りの開

始を可能にしていると報告している。相互行為において、行為は連鎖を為して生み出されており、通常、今起こったことは何らかの形で直前に起こったことへの反応であると理解され、次に起こることは今起こったことによって生み出されるものであると解釈される。つまり、相互行為の参加者は自らの行為と進行中の会話とがどのように関係しているか、或いは関係していないかを示す¹ことで、「今ここで」その行為を生み出す正当性(“why that now”)を常に相手に提示することが求められる。そのため、語りの開始においても、それまでの会話の中の何によってその語りが引き起こされたのかが示されることが多い²(Jefferson, 1978)。例えば、以下の会話の断片では、語りを始めようとする話し手が、直前の話題によって今から語る内容を想起させたことを明らかにしている。

(1) [Japanese tea time 3, 02:28, color coordinator 1]

((Eのネックレスの色が話題となった直後))

- 1 F: そう なんか色でおもいだしたんですけ [ど
 2 A: [うん
 3 F: なんか 私の日本の友達がふ [たり ぐらい[:
 4 A: [うん [うん
 5 F: なんか 日本で: (0.3) なんやろ (0.2)
 6 <カラーコーディネーターみたい>[な
 7 A: [あ: あるよね:

((Fの語りが続く))

Fは「色で思い出したんですけど」(1行目)と、直前に話題となった「色」がこれから開始する語りを想起させた直接の動機となっていると明言することで、他でもない今、想起した内容についての語りを開始することの正当性を示している。

このように、会話において語りを「問題なく」開始させ、進行させるためには、これから語りを開始することを予告・予告する「後方照応的な(Forward-looking)手続き」のほか、その語りがどのように直前の会話と関連しているのかが示される「前方照応的な(Backward-looking)手続き」も必要である。本稿で扱うのは、語りが開始、進行するのに必要なそのような手続きである。特に、語りの内容に入る前の開始部で見られる身体行動を検討する。語りの開始手続きについては、言語行動のみを扱ったものがほとんどであり(Jefferson, 1978; 串田, 2006; Sacks, 1974, 1992)、語りの開始のための非言語行動は、Streeck (2009a, 2009b)や Streeck & Hartge (1992)を除いてまだほとんど検証されていない。本稿では、データから頻繁に観察

1 進行中の会話や直前に起こったこととは無関係のことを「問題なく」開始する場合は、直接関係のないことが次に来ることが示される必要がある。例えば、「話は変わるけど」や「関係ないけど」がその手段である。

2 語りとそれまでの会話との関連性が、語りの終結部、つまり「オチ」まで明らかにされないこともある。その場合、聞き手には、直前の会話と進行中の語りとの関連が明らかにされるまで語りの聞き手として振る舞うことが動機付けられ、それが明らかになった時点で語りが終結に到達したことが認識される。

された、語りを開始する話し手による指さしに着目し、それが語りの開始手続きの中でどのように使用されるかを分析する。

1.1. 指さし

指さしの基本的な機能は、近くにある特定の物や人物や方向を指し示し（指示機能）、それに他者の注意を向けさせることである（Clark, 2005; Kendon, 2004; Kita, 2003）。Kendon (2004) は指さしの形と指さしが生み出す行為との関係を指摘する中で、特に人差し指による指さしが、注意を向けるべき対象を選択し、指し示すものであると述べている。また、指さしはその機能を果たすためには、その受け手が指さしとその対象に視線を向け、指さしによって何が指し示されているかを理解する必要があるが、指さしの対象は指さしをしている手そのものからではなく、それと共起する発話の内容と構造や、周囲の環境との関係の中で理解されるものであるという Goodwin (2003) の指摘も重要である。発話に伴う指さしの指し示す対象が、その受け手にどのように理解されるかを特定するためには、その指さしの形や方向だけでなく、共起する発話とそこでの産出タイミングや、進行中の活動、受け手による視線の獲得のタイミングにも着目する必要がある。

指さしについては、その指示機能を取り扱った研究が主であるが、相互行為における指さしに着目した最近の研究では、指さしが指示機能のほかに、相互行為上の資源としても使用されることを示している。Mondada (2007) は指さしがターン取得の資源として使われるケースを検討している。Mondada (2007) は図やその他の書類を使用しながら行われるミーティング中、図や書類に向けられた指さしが、多くの場合、「transition relevance place (TRP)」(ターン交替が適切となる位置)の前に産出されることに着目し、ターン取得時で産出される場合はそれらが発話の開始を示し、ターン取得前で産出される場合は、次のターンの取得を前以て要求するものであると分析している。

本稿では特に、目の前の相手に向けた指さしの、相互行為上の役割を検討する。一般に、目の前の相手に人差し指による指さしを向けることはポライトネス上好ましくないと見なされることが多いが、実際は会話中に目の前にいる参加者に対する指さしがしばしば起こることが観察されている。荒川 (2011) は、聞き手に対する指さしが、発話文の中で省略される主語や目的語の対称詞を示すケースを観察し、ポライトネスの観点から、主語や目的語の代わりに指さしで相手を指すことで、聞き手との関係を発話中の対称詞で明示することを避けることができると論じている。また、聞き手が知っている事物に対して言及する際、相手と話題を共有していることを示すポジティブポライトネスの働きとして聞き手への指さしが現われることも観察している。荒川 (2011) が2人会話における聞き手への指さしを分析しているのに対し、杉浦 (2013) は、3人会話における、その場の参加者への指さしにも着目している。杉浦 (2013) は、指示を主な機能としない指さしに着目し、それが次ターンの取得の意図を示したり、ター

ンを維持したり、次の話者を選択する資源となっていることを報告している。

本稿で扱うのも、3人以上の多人数会話における、参与者の一人への指さしであるが、ここでは特に語りの開始手続きにおけるその役割を検討する。会話における語りの開始手続きとなる発話の中で、参与者へ向けた指さしがどのように使用され、どのような行為を行っているのか、言語や視線などの他のモダリティにも着目したマルチモーダル分析の手法を用いて、指さしの連鎖上、及びターン上の位置との関係で探るのが目的である。

1.2. データ

本稿では、英語母語話者による実際の自然会話場面（主に食事中的の会話）の、合計4時間にわたるビデオ収録データを使用した。あくまで自然に起こる語りを検討することを目的としているため、実験室でのデータ収録は行わず、家族や大学寮のルームメイト間の普段の晩御飯風景を収録した。データの書き起こし（トランスクリプト）に使用した記号については、注を参照されたい。また、指さしや、それに伴う腕の動きや視線の動きなどは、発話との産出の関係をトランスクリプト上に示した。適宜画像を加え、番号をふっているが、画像を付けていないものについては文で説明を加えている。

2. データ分析

まず、本稿で取り扱うのは、語りの開始において話し手が他者に向けて産出する指さしの中でも、荒川（2011）で見られたような、指さしを向けた相手を知っている事物への言及を示す指さしではないことに注意したい。そのような指さしの場合、話し手が指さしを向けた相手との共有の知識に言及していることが、共起する発話の中で示されるが（「USJ 行ったときあったやんか」、「めっちゃさむかったな、三宮なあ、あれ……」（荒川 2011）など）、本稿で扱う指さしにはそのような発話は伴っていない。また、そのような指さしが起こる場合、共起する発話は指さしの対象となる参与者のみに向けられるが、ここで扱う指さしに伴う発話は、指さしを向けた相手以外にも向けられていることが、話し手によって示されている。本稿で焦点とするのは、特定の聞き手の知識が言及される場面ではなく、語りが開始される場面において、指さしを向けた相手だけでなく、それ以外の参与者にも話し手の視線が向けられるケースである。

以下では、語りの開始時前において、話し手が参与者の一人に向けて産出する指さしを検討する。本データからは、発話を終えたばかりの話し手や現在の話し手に向けられる指さしと、それ以外の参与者へと向けられる指さしとの二種類が観察された。

2.1. 直前または現在の話し手に向けた指さし

まずはじめに、現在進行中の話し手へと向けられる指さしを見てみよう。会話の中で想起さ

れた内容についての語りが始まる場合、それまでの会話中の何によってその語りを引き起こされたのかが示されることが多いことは既に述べた。以下の断片(2)では、聞き手RがCの語りの最中に、語り手Cに向けて指さしを産出することで、「今何かを思い出した・思いついた」ことを示し、ターンの取得要求を行うことが観察されている。RはCの左隣に座っており(図1)、Cのターン進行中に右腕を動かしてCへの指さしを右手で産出している。ここで重要なのは、語る内容が想起された瞬間と、想起されるきっかけとなった対象が進行中の発話に含まれていたことが、指さしとそのタイミングによって示されていることである。


以下断片(2)の1行目から5行目では、Cが自分の祖母が鶏肉を食べない理由が、頭部を切断された鶏が走り回っているのを見たことにあると語っている。そのほぼ直後にRが腕を上げ始め、Cに対して指さしをしている。



図1 断片(2)、(3)の会話参与者

(2) [Four Girls, 27:40, Chicken 2]



1 C: =>This is such a random tangent but
 2 My grandmother liked to this day refuses to eat chicken like,
 3 She hasn't eaten it like her entire life,<
 4 · hh because (.) she then- on their farm, (0.3)
 5 she saw chickens >running around with their heads< cut off hhhah

Rが右腕 を上げ始 める	2 	Rが指さし を保持し、 視線をNへ	
1	2	3	
<hr style="border: 0; border-top: 1px solid black; margin: 5px 0;"/>			
6	sh(h)e wa(h)s like hh	[she was thohh-	she was like=
7 R:		[no wait	
	4 ((保持))		
<hr style="border: 0; border-top: 1px solid black; margin: 5px 0;"/>			

8 C: =those things >she goes<those animals are the stupidest

5 ((右手の位置を保持したまま、人差し指を伸ばしたり折り曲げたりする))

9 animals ever I [refused to eat lik-(eat them there that stupid)=
10 N: [hhha Hah

6 Rが右手の人
差し指を伸ば
し始める   8

11 R: =NO o↓k[ay Ba:b↑e[l? (0.4)
12 N: [·hh [°that's [really funny°
13 R: [Have ya'll seen the movie
14 Ba[bel?
15 C: [uh[uhn

16 M: [Is that th- Brad Pitt?=
9 ((Rは指さしをしていた右手でこぶしを作り、それを口元へ))

17 R: =yea[h
((Rの語りが続く))

この断片では、まず、Cの語りの最中、聞き手のRが何かを思いついたことを表わしていることが観察できる。Cが「she saw chickens running around with their heads cut off (祖母が、頭の切断された鶏が走り回っているのを目撃した)」(5行目)と発話したすぐ後、Rは口を開き、わずかに頭を上げる。そして、テーブルに置いていた右手の人差し指で指さしを作りながら、肘をついたまま右手を弧を描くように身体の左側から右側に向けて上げ(ジェスチャー2)、進行中のCの発話に重複して「no wait (いや、待って)」(7行目)と発し、指さしをCに向けている。

このRの振る舞いによって、RがCの語りの最中に何かを思いついたことだけでなく、それを思いつくきっかけがCの発話中にあったことも示されている。つまり、特定の何かを指し示すという指さしの機能と、進行するCの発話におけるRの指さしの産出タイミングにより、Cが「たった今」発したその特定の内容から、Rが何かを思いついたということが聞き手に示されているのである。また、「No wait」と、Cに直ちに発話を止めるよう要求する発話が指さしと共起していることも注目に値する。現在の話し手に「待って」と告げるこの命令形の発話は、Rが今すぐターンを取得したいという意図を示している。つまり、「No wait」という発話とともに産出されることにより、Rのここでの指さしは、進行中のCの語りから想起した何かについて話し始めるため、直ちにターン取得を要求するものであると理解できるのである。更に、現在進行中の発話の特定の部分に対し、それが発された直後に反応することは、ターンの取得要求を「今ここで」行うべき理由の提示にもなっている。たった今Cが言及したことに

関して思いついた事柄を話し始めるためには、Cの語りが先に進んでしまう前のまさに今のこの位置でターンを取得する必要があるということである。

この後、Cが発話を継続したため、Rのターン取得の試みは失敗している。しかしながら、Rは指さした手の位置をそのまま保持することによってターンの取得要求を継続して示し(ジェスチャー4、5)、Cのターンが終了するとともに再び指さしを復活させ(ジェスチャー6、7)、ターンを取得している(11行目)。ここでは、Cの発話が継続する間、指さしそのものは一時的に消滅するが、手の位置を保持し続けた後に指さしを復活させてターンを取得することで、指さしを最初に産出した時に開始しようとした発話を、今開始していることが、参与者に示されている。事実、Rはある映画の中で「鶏の首が切られた」シーンについてその後語り始める。まさに直前のCの語りによって関連するシーンを思い出し、それについて言及することを意図していたことがわかる。

以上のように、この例からは指さしが語りの開始のための前方照応的な(直前との関連を示す)手続きを担っていることが観察できた。話し手を指さし、「たった今その話し手の発話中に言及された特定の内容」に反応していることを示しながらターン取得要求を行う(「No wait」)ことで、今想起した内容について「今ここで」話し始める意思と正当性が示されている。これは、進行中の音声発話との断続的な重複が不適切となる音声言語とは違い、進行中の発話を邪魔することなくそれに重複して産出することができるジェスチャーの性質を利用した手続きであるといえる。

上の断片(2)では、進行中の発話における特定の箇所にもみ反応しているため、それが出た直後に現在の話し手への指さしが産出される必要があった。それに対し、次に示す断片(3)では、語りが終わった後にその語り手を指さすことによって、直前の語りにおける特定の箇所ではなく、その語り全体を受けて、次の話し手が発話を開始していることが示されている。

以下の断片は、Cが幼少期に獣医に憧れており、小学校の課題で動物病院のジオラマを作ったと語った後の会話である。



図2 Cに向けたMの指さし:「vet so badly」

(3) [Four Girls, 26:52, Veterinarian]

1 N: hahahaha

2 (0.5)

1 わずかに顔を上げる

3 M: (0.2)

2 指さしを作った
左手をCの方向
にのばし始める4 I wanted to be a vet so badly,4 上半身を後方に倒
しながら、指さし
をして伸ばしてい
る手を身体に引き
寄せる

5 ·hh uhm in our ranch, one of the dogs had a

6 (trapped) chicken, so I assumed

7 [he broke his leg

(Mの語りが続く))

ここで、Cの語りの直後、その語りに対する反応が適切となる連鎖上の位置において、少しの間をおき（2行目）、Mは顔を上げ（3行目）、「I wanted to be a vet so badly（獣医にとっても憧れていた）」と言ってターンを取得している（4行目）。この発話は次の理由から、Mの語りの開始を予告するものであるといえる。まず、Cの語りへの反応が適切な位置で、Mは「獣医にあこがれていた」と、その語りに関連する経験が自分にもあることを示している。これは、類似経験について語る「第二の語り（Second story）」(Sacks, 1992) の開始を示すものである。次に、Mは「I wanted to be a vet so badly」を、文末の音を下げず、「継続のイントネーション」で終え、さらにターンが続くことを示している。また、Mは、「wanted」と発すると同時に、左腕を前方に伸ばし始め（ジェスチャー2）、「vet（獣医）」と発すると同時に左腕を完全に伸ばし、左手の人差し指でCへの指さしを産出している（ジェスチャー3）。そして、腕を伸ばして産出した指さしを、文末後も保持し続けることで、ターンがその後も継続することを示している。

ここで、語りの開始を示しながらMが産出するCへの指さしについて更に考えたい。まず着目すべきは、指さしをCに向けるタイミングが、それと共起する発話における特定の語、「vet

(獣医)」の産出タイミングにぴったり合うよう調整されているという点である。「vet」の産出タイミングに合わせて直前の話し手への指さしを産出することで、Mが直前の話題「vet」に直接反応しているということ、更には、Mが開始する発話が、直前の語りに関連して想起されたものであるということが表わされている。また、直前のCの語りが、「動物病院の模型を作った」というオチで終わっており、「幼少期に獣医になりたかった」というもともとの語りの出発点の焦点からずれているのに対し、Mはターンを取得して最初に「I wanted to be a vet so badly (私は獣医にとっても憧れていた)」と発しながら直前の話し手に指さしをすることで、直前の語りのもともとの出発点へと会話の焦点を戻しているともいえる。つまり、直前の話し手への指さしによって、これから開始する語りが直前の語りによって直接引き起こされたものであることが示され、直前の語りの出発点に話題の焦点が戻されているのである。

更に、指さしをCに向けると同時に、MがCに視線を向け、C(とその隣のR)の視線を獲得していることも重要である。Mはその後、視線を下に向け、そのまま文末までCへの指さしを保持した後、伸ばしていた左腕を引っ込めて(ジェスチャー4)、語りに入っている。つまり、指さしと共に視線を直前の話し手に向けることで、直前の話し手を、次に始まる語りの中心的な聞き手として指定しているのである。

まとめると、Mは「第二の語り」の開始を示唆しつつ、共起する発話とのタイミングを調整しながら直前の話し手を指さすことで、これから始める語りが直前の語りにより生じたものであることを示し、更に直前の話し手を中心となる聞き手として指定していることができる。つまり、ここでターンを開始する話し手によって産出された指さしは、これから開始する語りがそれまでの会話とどのような関係にあるかを示す、語りの開始の前方照応的な手続きの中で産出されたものであるということである。それと同時に、これから開始される語りの中心的な聞き手の注意を得ることで、語りの適切な参与枠組みの形成にも成功しているのである。

2.2. 「第三の参与者」への指さし

上に挙げた2つの例では、現在の話し手や直前の話し手に向けられた指さしが、次に開始される語りとそれまでの会話との関係性を示すという点で、語りの開始の前方照応的な手続きの一部を担っていることが明らかになった。それに対し、次に検討するのは、指さしがそれまでの話し手ではない、その他の参与者に向けられるケースである。ターンを取得して語りを開始する話し手が、それまでの話し手以外に指さしを向ける場合、その指さしはどのような行為として受け取られるのであろうか。

以下の断片(4)は、家族による会話からの抜粋である。Nieceが、アクセントに関してある有名なアニメのエピソードについて話した後、その左隣のMotherがターンを取り、語りを始める場面である。Motherは、ターンの取得と共に、テーブルを挟んで向かいに座っている自分の夫、Fatherの名前(「Stan」)を発しながらFatherに向けて指さしをした後、Fatherの過

去の言動についての語りを開始している。

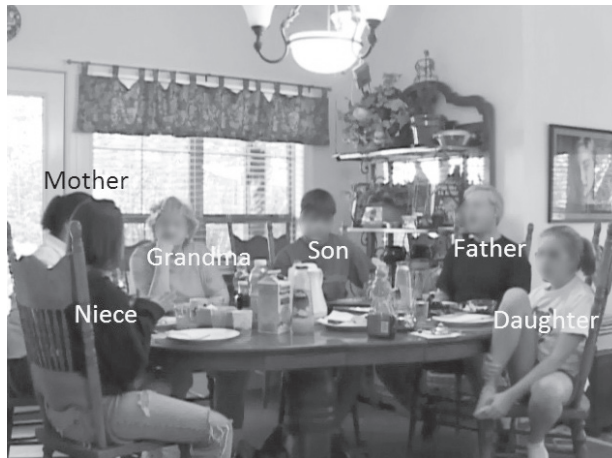
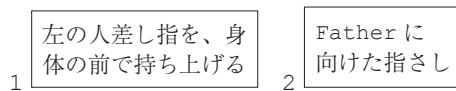


図3 断片(3)の会話参与者

(4) [Dallas Family 2, 30:45, Accent]

- 1 Niece: nobody kne(hh)w li(h)ke what he was sayin'
 2 a[nd=
 3 Son: [mm [hmm
 4 Grandma: [=Is that a bloody no[se, hun? ((Daughter に向けて))



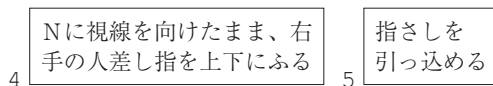
5→Mother:

[Sta(hh)n hhha



MはNに視線を向け、指さしを保持

- 7 Son: Ehe ehe ehe ehe
 8 (0.4)



- 9 Mother: We were in a pu(h)b (0.2) in Scotland and, (0.5)
 10 and we wer- (.) we've just gone to a glass factory
 11 and, we were (0.4) in the middle of >I mean<
 ((以下、Motherの語りが続く))

まず、Niece が語りを終わると共に、Mother は夫の Father へと視線を向け、笑いながら Father の名前「Stan」を発し（5行目）、正面に座っている Father に向かって右手で指さしをしている（ジェスチャー2）。そして、その指さしを保持しながらすぐに Niece へと視線を向け（ジェスチャー3）、Niece から視線を獲得すると共に、「We were in a pub（私たちがパブにいたときに）」と言って、指さしを数回振った後、指さしをしていたその右手をひっこめ（ジェスチャー5）、「in Scotland（スコットランドで）」と発話を続けている。Niece の直前の語りへの反応が適切となる位置で Father の名前を笑いながら発し、「スコットランドのパブにいたときに」と過去に言及することで、過去のなんらかの経験についての語りの開始が予示されるだけでなく、その語りも、直前の語りとは話題上つながりのあるものとして聞き手に理解されることとなる（串田 2006）。特に、Niece の語りも言語のアクセントに関するものであったことに対し、ここで「in Scotland（スコットランドで）」と言及することは、スコットランドのアクセントについての語りの開始を予測させる。つまり、先の語りとは類似性を持つ第二の語りも開始されることが予告されているのである。また、Niece の語りの後で、「Stan」と笑いながら発し、その名前的人物（Father）に指さしを向けることから、これから開始される語りも、Niece の語りもきっかけとなって想起された、「Stan」に関する笑えるエピソードであるということも示されている。

前述の2つの事例と異なり、ここで生じる指さしの指示対象は、直前の発話の内部や語り全体にあるのではなく、指さしを向けられた参加者そのものである。ここで指さしの対象となる Father は、Goodwin (1984) が「Principal character」とよぶ、語りの登場人物である。自身の行動が描写の対象となるため、Father は Mother の語りの進行中、その語りの聞き手としてではなく、登場人物としての振る舞いをすることが求められる（Goodwin, 1984）。語りの進行中、語り手以外の参加者は様々な形でその語りへの参加を達成することができる。語りの内容を既知っている「Knowing recipient」は、その語りの進行の手助けを行うなど、その知識を持たない「Unknowing recipient」とは異なる形での参加が可能である（Goodwin, 1981）。ここでも、語りの登場人物となり、既に語りの内容を知っている参加者と、知らない参加者がいるため、それぞれの参加者はそれぞれに適したやり方で語りに参加する必要がある。Mother はつまり、語りの冒頭で Father には指さしを向け、Niece には視線を向けて Niece からの視線を求めることで、語りの登場人物となる参加者（Father）と、中心的な聞き手となる参加者（Niece）とを同時に示し、それぞれに適した参加枠組みを提示しているのである。これは、指さしと視線と音声言語という三つの別々のモダリティを用いることにより、同時に進行することが可能となる行為であるといえるだろう。

以上をまとめると、この例における Mother の指さしが行っているのは、次の二つである。
 (1) 注意喚起：これから開始される語りの中心人物へ、他の参加者の注意を向けさせるとともに、中心となる聞き手の注意を語り手に向けさせる。
 (2) 参加構造の提示：会話の参加者に対

し、これから開始される語りへの適切な参加の枠組みを示す。ここでは、指さしの対象となる参加者が語りの登場人物であり、視線を向けた相手が語りの中心的な聞き手として指定されている。すなわち、ここでみられる Mother による指さしは、次に開始しようとする語りの特徴と登場人物を予告し、そのための参加枠組みを提示するものであるため、語りの後方照応的な開始手続きの中で産出されているものであるといえる。

3. まとめ

以上、日常会話において語りの開始が予告される際、語り手が参加者の一人に向けて指さしをする事例を検討した結果、指さしが連鎖をつないだり、後続する連鎖へ注意を向けさせたりすることが明らかになった。発話中の現在の話し手や、直前の話し手に向けられる指さしは、なぜこの特定の連鎖上の位置で、この特定の語りを開始するのか(“Why that now”)を明らかにしなければならないという相互行為上の課題に対応した、前方照応的なものであった。これから開始される語りや、指さしの対象となっている話し手の発話内容を直接のきっかけとして引き起こされたものであることが示されていただけでなく、共起する発話における指さしの位置によって、何がそのきっかけとなったかも特定されていた。これは、音声言語と問題なく重複できる指さしの性質を利用することにより可能となるものである。

一方で、直前や現在の話し手ではない、第三の参加者に向けられた指さしは、これから開始される語りのための環境を整えるものであるという点で、後方照応的な性質のものであった。通常、TCU (turn constructional unit: ターンを構成することのできる最小の単位) の終わり毎に、1つのターンの終結が可能となるため、語りのように複数の文から成るターンを産出するためには、通常の会話の順番取りシステムを一時的に停止させなければならないという相互行為上の課題が生じる。第三の参加者への指さしは、この課題に対応するため、語りの開始とその性質を前以って明らかにするだけでなく、参加者にそれへの適切な参加の仕方を事前に提示するものであった。これは、多人数会話としての性質が関わっていると考えられる。参加者が複数いる会話においては、参加者ごとに語り手との共有知識が異なる可能性が生じる。そのため、語りの種類によっては、参加者にそれぞれ別々の参加の仕方が求められることがある。本稿で明らかになったのは、話し手が、指さしという、音声発話や視線と重複してもそれらを邪魔することなく行為を形成できるモダリティを利用することで、もっとも効率的な方法で、複数の参加者に同時に適切な参加の仕方を示すことができるということであった。

本稿の目的は、指示以外の指さしの相互行為上の役割を探ることであった。指さしそのものだけでなく、指さしが産出される連鎖上、ターン上の位置、及び、共起する音声言語や視線などの他のモダリティにも着目したマルチモーダル分析により、順番取りシステムの中で連鎖を構築しながら進行する会話において、語りを開始する上で生じる課題に対し、身体モダリ

ティである指さしの性質や指示機能がどのように利用されるかを明らかにする試みであった。それにより示されたのは、会話においてそのつどそのつど生じる相互行為上の課題への効率的な対処のために、参加者がその場のターンや連鎖の位置や進行中の行為に応じて言語や身体の使用を調整する可能性であった。この可能性を更に模索するためには、今後、語りの開始だけでなく、相互行為の他の局面における指さし以外の身体行動にも着目する必要があるであろう。

キーワード：指さし、語りの開始手続き、会話分析、マルチモーダル分析、多人数インタラクション

注

会話データの書き起こしにあたっては、Jefferson による会話分析のトランスクリプション規則に従った。使用した記号の意味は以下の通りである。

:	直前の音の引き延ばしとその長さ
(数字)	沈黙の長さ
.hh	吸気音とその長さ
hh	呼気音とその長さ
(h)	笑い声
[発話の重なるの開始
]	発話の重なるの修了
=	繋がれた二つの発話が隙間なくつながっている
.	語尾の下降
,	継続音調の語尾
°文字°	相対的に小さい声での発話
<u>文字</u>	相対的に大きい声での発話
-	直前の音が中断されている
>文字<	相対的に速く発されている
((文字))	身体動作の描写

参考文献

- 荒川歩 (2011). 指さし行動と発話による談話の達成. *社会言語科学*, 14(1), 169-176.
- Clark, H. H. (2005). Coordinating with each other in a material world. *Discourse Studies*, 7 (4-5), 507-525.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.
- Goodwin, C. (1984). Notes on story structure and the organization of participation. In M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action* (pp. 225-246). Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, C. (2003). Pointing as situated practice. In S. Kita (Ed.), *Pointing: Where language, culture and*

- cognition meet* (pp. 217-41). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Jefferson, G. (1978). Sequential aspects of storytelling in conversation. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction* (pp. 219-248). New York, NY: Academic Press.
- Kendon, A. (2004). *Gesture: Visible action as utterance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 串田秀也 (2006). 『相互行為秩序と会話分析：『話し手』と『共-成員性』をめぐる参加の組織化』世界思想社
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis. In J. Helm (Ed.), *Essays on the verbal and visual arts* (pp. 12-44). Seattle: University of Washington Press.
- Mondada, L. (2007). Multimodal resources for turn-taking: Pointing and the emergence of possible next speakers. *Discourse Studies*, 9 (2), 194-225.
- Sacks, H. (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In R. Bauman & J. Sherzer (Eds.), *Explorations in the ethnography of speaking* (pp. 337-353). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation*. Oxford: Blackwell.
- Streeck, J. (2009a). *Gesturecraft: The manufacture of meaning*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Streeck, J. (2009b). Forward-gesturing. *Discourse Processes*, 46 (2), 161-179.
- Streeck, J., & Hartge, U. (1992). Previews: Gestures at the transition place. In P. Auer, & A. Di Luzio (Eds.), *The contextualization of language* (pp. 145-157). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 杉浦秀行 (2013). 相互行為の中の指さし：指さし行為の非指示性. 社会言語科学会第31回大会発表論文集, 76-79.

Abstract

When a Participant is Pointed at Upon Story Entry:
A Multi-modal Analysis of a Pointing Gesture in a Multi-party Interaction

Eiko Yasui

Drawing on a micro-analytic perspective, this study investigates a pointing gesture employed upon the start of a spontaneous story during naturally-occurring conversations. Specifically, I focus on pointing directed toward one of the participants. The present data demonstrates that pointing towards a previous or ongoing speaker has a backward-looking function; incipient storytellers can indicate not only that they have something to tell in relation to the prior speech, but also what exactly in the prior talk triggered the upcoming story, thereby showing “why that now” s/he has to initiate the story at the specific moment in talk. Also, the data reveals the use of a forward-looking pointing gesture, which can project a feature of an upcoming story as well as indicate an appropriate participation framework to different kinds of recipients simultaneously. This study thus aims to explore interactional functions of pointing by investigating how its basic referential function and its feature as bodily conduct allow a participant to deal with various interactional problems in securing the floor for storytelling during conversation.

Keywords: Pointing gesture, story entry, multimodal analysis, conversation analysis, multi-party interaction